

目次

	まえがき	i
序章	本書の概要	1
	本書の構成	1
	用語の解説	5
第1章	語形成と音韻構造の関係	9
	1.1 語形成の種類	9
	1.2 音韻構造の変化	12
	1.3 語形成にかかる音韻制約	15
	1.4 音韻規則にかかる制約	19
第2章	東京方言の複合語アクセント	23
	2.1 東京方言のアクセント体系	24
	2.1.1 アクセントの型とアクセント規則	24
	2.1.2 複合語アクセント規則	27
	2.2 複合語アクセント規則再考	30
	2.2.1 後部要素が短い複合語	30
	2.2.2 複合語アクセント規則の一般化	38
	2.2.3 東京方言の言語類型論的特徴	46
	2.2.4 例外の脳内指定	50
	2.3 単純名詞アクセントとの関係	51
	2.3.1 外来語アクセント規則	51
	2.3.2 単純語アクセントと複合語アクセントの一般化	54
	2.3.3 複合語アクセントと単純語アクセントの違い	58

2.3.4	外来語の特殊性	61
2.4	動詞・形容詞への一般化.....	70
2.5	ラテン語・英語との共通性.....	74
2.5.1	ラテン語・英語のアクセント規則	74
2.5.2	日本語との比較	77
2.6	例外的なアクセント規則.....	84
2.6.1	X- 太郎と X- 次郎のアクセント	86
2.6.2	X- 町のアクセント	88
2.6.3	X- 屋のアクセント	90
2.6.4	X- 物のアクセント	92
	【参考資料 1】 「X- 物」のアクセント	95
第 3 章	一語化しない複合語	97
3.1	語と句の境界	98
3.2	形態・意味構造と音韻構造のミスマッチ	101
3.2.1	並列構造	101
3.2.2	枝分かれ構造	103
3.3	意味制約と枝分かれ制約の一般化.....	107
3.4	語順と複合語化	109
3.5	方言差.....	115
3.6	中途半端な複合語化	117
	【参考資料 2】 並列構造の複合語	121
	【参考資料 3】 右枝分かれ構造の複合語	121
第 4 章	アルファベット頭文字語のアクセント	123
4.1	2つのアクセント型	125
4.2	起伏式のアルファベット頭文字語	132
4.3	パラドックス	140
	【参考資料 4】 アルファベット頭文字語調査語彙.....	143

第5章 短縮語形成のメカニズム	145
5.1 短縮語の種類と基本原理	145
5.2 基本的事実と制約	150
5.2.1 単純語の短縮	150
5.2.2 入力条件と出力条件	151
5.2.3 最小性条件 (1)	152
5.2.4 最小性条件 (2)	155
5.2.5 *〔軽音節 + 重音節〕	157
5.2.6 残された問題	161
5.3 アクセント基盤説	162
5.4 疑似複合語説	163
5.4.1 概要	163
5.4.2 4モーラと5モーラの境界	166
5.4.3 分節点	175
5.5 基底3分割構造説	179
5.5.1 概要	179
5.5.2 アクセントとの一致	181
5.5.3 短縮語との一致	185
第6章 語形成過程のアクセント：無標の出現	189
6.1 「_ズ」(グループ名)のアクセント	189
6.2 ポケモンのアクセント	198
6.3 混成語のアクセント	201
6.3.1 混成語の基本構造	201
6.3.2 混成語のアクセント	208
6.4 短縮語のアクセント	212
【参考資料5】 混成語データ	219

第7章	テンプレート型の語形成	225
7.1	赤ちゃん言葉	225
7.2	ニックネーム(愛称)	231
7.3	逆さ言葉	237
7.4	「グレージュ」タイプの混成語	244
	【参考資料6】 [お+名詞(N)]	250
第8章	結び	253
8.1	出力のアクセント構造	253
8.2	語形成にかかる音韻制約	256
8.3	音韻規則にかかる統語・意味制約	257
8.4	今後の展望	258
【補遺】	平板型の生起条件	261
条件1	語種と語長の条件	261
条件2	意味・用法との関係	265
条件3	平板化形態素	266
条件4	疑似平板化形態素	271
条件5	特定の韻律構造	273
条件6	特定の語形成規則	275
	【参考資料7】 動詞からの転成名詞を後部要素(N2)とする複合語	278
	英文要旨(English summary)	283
	参照文献	287
	索引	295
	著者紹介	304

序章

本書の概要

本書の構成

本書は合計8つの章と巻末の補遺から成る。第1章では、日本語に見られる様々な語形成過程を概観した上で、語形成と音韻構造の関係をめぐる諸問題を3つの主要テーマとしてまとめ、それぞれを解説する。

本書の前半(第1章～第4章)の中心となるのが第2章である。この章では、語形成の中でもっとも多くの研究がなされてきた複合語形成を取り上げ、東京方言の複合語アクセント規則を再検討する。具体的には、言語構造や規則について有標なものと無標なものを区別する有標性理論 (markedness theory) に基づき、(i) これまで複雑な規則群として捉えられてきた東京方言の複合語アクセント規則が、普遍的な制約・原理を使って非常に簡潔な形に捉え直すことができること、(ii) その規則が同方言の単純語のアクセント規則や動詞・形容詞のアクセント規則と一般化できること、(iii) 同じアクセント規則がラテン語・英語のアクセント規則に酷似していること、以上のことを指摘する。この分析から、東京方言の基本的なアクセント型が「語末に接しない最右端のフット」にアクセント核を有する型であることを実証する。

第2章の対象は音韻的に一語化する複合語であるが、これまで音韻的に一語化しない複合語の研究は少なかった。第3章では複合語アクセント規則の適用を受けない複合語を祖上にあげ、この規則の適用を様々な要因が妨げていることと、それらの要因のいくつかが統一的に説明できることを論じる。この章の後半では、音韻的な一語化を妨げる要因に地域差があることを指摘し、さらに音韻的に一語化するものとしめないもの間に中間的な複合語—中途半端に複合語化するもの—があること、その3種類の複合語が音韻

的には連続したものとして捉えられることを指摘する。

続く第4章ではJRやNHKといったアルファベット頭文字語のアクセント構造を分析する。東京方言のアルファベット頭文字語はJR（ジェーア¹ール）やNHK（エヌエイチケ¹ー）のようにアクセント核を有するものと、SL（エスエル⁰）、BS（ビーエス⁰）のような平板型のもの2種類に分かれる（¹はアクセント核の位置、すなわちピッチ下降が生じる位置を示し、また語末の⁰は平板型、すなわちアクセント核を持たず、語全体が平坦に発音されるアクセント型を表す）。この章ではアクセント調査のデータから、この2つのアクセント型の分布が単語の長さ（モーラ数）と韻律構造（音節構造）を元に予測できることを示し、あわせて起伏式のアクセント型（ジェーア¹ール、エヌエイチケ¹ー）が第2章で論じた複合語アクセント規則で説明できること、一方、平板型のアクセント（エスエル⁰、ビーエス⁰）は一般の外来語（アメリカ⁰、アカベラ⁰）と同じ音韻条件によって生じることを論じる。この章の最後では東京方言と全く異なるアクセント体系を持つ鹿児島方言でもアルファベット頭文字語が2つのアクセント型を示すこと、その分布が東京方言と同じように韻律構造によってほぼ決まること、さらにそのアクセント型がこの方言の複合語アクセント規則によって説明できることを指摘する。

本書の後半（第5章～第8章）の中核を成すのが第5章で論じる短縮語形成である。この章では「ストライキ→スト」「イラストレーション→イラスト」のような外来語の短縮形（短縮規則の出力）に様々な音韻制約が働いていることを解説した上で、ストライキがストラではなくストとなり、イラストレーションがイラやイラスではなくイラストとなるメカニズムを分析する。短縮語に関する研究で未解決となっていた問題であるが、この問題を解決するために提案された3つの分析を比較検討してみたい。一見すると外来語の短縮語に特有の原理が働いているように見えるが、実際には複合語の短縮（携帯電話→ケータイ）と同じ原理に支配されており、またアクセント規則や野球の声援と同じ原理が関わっている可能性が高い。

続く第6章では、複合語や短縮語以外の語形成過程に視野を広げ、様々な語形成規則の出力アクセントが第2章で論じた東京方言のデフォルト（基

本) アクセント規則によって決まっていることを示す。具体的には、ライオンズやドラえもんズのような「ズ」という接辞が付いた語(グループ名)のアクセント(6.1節)、ゴリキー(<剛力)やサワムラー(<沢村)をはじめとするポケモンのアクセント(6.2節)、ゴジラ(<ゴリラ/クジラ)やリンプー(<リンス/シャンプー)などの混成語のアクセント(6.3節)、スト(<ストライキ)やイラスト(<イラストレーション)のような短縮語のアクセント(6.4節)に、第2章で論じたデフォルトのアクセント構造が現れていること、つまりこれらが無標の出現(the emergence of the unmarked: McCarthy and Prince 1994)であることを示す。

第7章では、出力に一定の韻律的鋳型(prosodic template, テンプレート)が課されるタイプの語形成過程を取り上げ、入力構造が鋳型に写像されるプロセスと、出力のアクセント型が決まる原理を考察する。具体的にはマンマ(<まま)やハイハイ(<這う)などの赤ちゃん言葉(7.1節)、サッチャンやサッチーなどのニックネーム(7.2節)、マイウ(<うまい)やサイヤ人(<野菜)などの逆さ言葉(7.3節)、そしてグレーとベージュからグレージュが作り出されるタイプの混成語(7.4節)である。これらの鋳型の語形成過程においても、「語末に接しない最右端のフット」にアクセント核を置く型が基本であることを論じる。最後の第8章では、本書の主な主張をまとめ、語形成過程と音韻構造に関わる今後の研究を展望してみたい。

本書末の【補遺】には、東京方言において平板型という不思議なアクセント型が生起する条件をまとめた。平板型がどのような条件下で生じるかは全章に関わる問題であるが、【補遺】ではこれらを6つの条件としてまとめてみた。また各章の議論の元となったデータを章末に【参考資料】として掲載した。

なお、本書の大半は書き下ろしの原稿であるが、その執筆にあたってはこれまで公刊してきた論文が元になっている。大きく関係しているのが下記の論文である。

<第1章>

窪菌晴夫(2019)「語形成とアクセント」岸本秀樹(編)『レキシコンの現代理論とその応用』49-71. くろしお出版。

第 1 章

語形成と音韻構造の関係

1.1 語形成の種類

語形成を入力と出力の長さという点から分類すると、(1) のように足し算的に長くなる過程と、(2) のように引き算的に短くなる過程、そして (3) のように入力と出力の長さが大きく変わらない過程の 3 つのタイプに大別できる (窪菌 2002a)。

(1) a. 複合語 (compounding)

サッカー + クラブ → サッカー - クラブ

大和 + なでしこ → 大和 - なでしこ

b. 派生語 (affixation)

非 + 常識 → 非 - 常識

社会 + 人 → 社会 - 人

ミス + する → ミス - する

c. 重複語、疊語 (reduplication)

人 + 人 → 人 - 々

ゆら + ゆら → ゆら - ゆら

(2) a. 単純語短縮 (shortening, truncation)

ストライキ → スト

イラストレーション → イラスト

b. 複合語短縮 (compound shortening/truncation)

ポケット - モンスター → ポケモン

携帯 - 電話 → ケータイ

第2章

東京方言の複合語アクセント

1.1 節で見たように語形成には多様な種類・形式があるが、自然言語の中でもっとも一般的と言っているのが複合語形成である。独立して用いられる複数の語を1語として統合する過程であり、これにより既存の語から新しい語が作り出される。日本語でも非常に生産的な語形成過程であり、新型コロナウイルス（＜新型＋コロナ）やドライブレコーダー（＜ドライブ＋レコーダー）をはじめとして日夜新しい複合語が作り出されている。

複合語の音韻構造と言えば、連濁と並んで複合語アクセントが問題になる。とりわけ複合語アクセントはどの言語でも複合語アクセント規則として定式化されるもので、日本語でも複合語の音韻的指標となっている。日本語ではこのアクセント規則の適用範囲が広く、「サッカー＋クラブ」や「大和＋撫子」のような〔語＋語〕の構造だけでなく、「非＋常識」「社会＋人」や「新聞＋社」のような自立性の低い要素を前部もしくは後部に持つ構造（1.1 節で派生語と呼んだもの）もその適用対象となる。

この章では東京方言の複合語アクセント規則を取り上げ、一見複雑そうに見えるアクセント現象が実は自然言語によく見られる一般的な原理群によって説明できることを示す。また同じ原理群が、単純名詞のアクセントや動詞・形容詞のアクセントをも支配していることを論じ、英語やラテン語のアクセント規則とも酷似していることを示す。

具体的には、東京方言のアクセント体系と複合語アクセントに関するこれまでの研究を紹介した上で（2.1 節）、複合語アクセントに関する新しい一般化を試み（2.2 節）、次いでその一般化が単純名詞のアクセント（2.3 節）や動詞・形容詞のアクセント（2.4 節）にも拡大できることを示す。この章の後半では、東京方言のアクセント規則がラテン語や英語のアクセント規則と

第3章

一語化しない複合語

前章では「カブト虫」や「南アメリカ」などの複合語のアクセントを出発点として、東京方言の複合名詞、単純名詞、動詞、形容詞など広範囲な語が同じアクセント規則に支配されていることを指摘した。ここまでの分析は第1章の冒頭で述べた語形成と音韻構造の関係をめぐる3つの主要問題の中の、「出力の音韻構造がどのような原理によって決まるか」という問題、すなわち音韻構造の変化に関わる問題（1.2節で見た(4a)のテーマ）であった。これらはすべて複数の要素が1つのアクセント単位にまとまる例であったが、複合語の中には音韻的に1つにまとまらないものも少なからず存在する（Kubozono 1988, 窪菌 1995a）。本章では後者のタイプの複合語に焦点を当て、「音韻規則の適用を統語構造や意味構造がどのように制限するか」という問題（1.2節であげた(4c)のテーマ）を複合語の意味構造や形態統語構造の視点から考察する。

このためにまず、複合語の一語性を示すもっとも確かな指標が複合語アクセントであることを確認する（3.1節）。複合語アクセント規則を阻止する要因には様々なものがあるが、この中で並列構造（coordinate structure）という特定の意味構造と、3要素以上から成る複合語に生じる特定の枝分かれ構造に焦点を当て（3.2節）、その2つの構造が係り受け構造の観点から一般化できることを論じる（3.3節）。次いで、語順と複合語アクセント規則の関係に視点を広げ、係り受けという視点から説明できる例とできない例があることを指摘する（3.4節）。3.5節では分析を東京方言以外の日本語方言に広げ、アクセント的に1語にまとまるか否かという点において方言差が存在することを報告する。最後に、1つのアクセント単位にまとまる複合語とまとまらない複合語の間に、中間的な振る舞いを見せる複合語があることを指摘

第4章

アルファベット頭文字語のアクセント

第2章では複合語アクセントを起点に東京方言のアクセント体系を考察し、続く第3章では、複合語アクセント規則の適用を受けず複数のアクセント単位に分かれてしまう複合語と、中途半端な複合語化を示す中間タイプの複合語の構造を分析した。ここまでの議論では複合語化という語形成過程を中心に東京方言のアクセント構造を見てきたが、本章ではJRやNHKなどのアルファベット頭文字語 (alphabetic acronym) のアクセント構造を考察する。第1章の冒頭にあげた語形成と音韻構造の関係をめぐる3つの主要問題の中の「出力の音韻構造がどのような原理によって決まるか」という問題(第1章の(4a))を、アルファベット頭文字語について分析しようとするものである。

頭文字語は文字通り頭文字をつなぎ合わせて作られるものであり、その入力となるのは複合語句である。日本語ではひらがな、カタカナ、漢字、アルファベット、数字といった多種類の文字が用いられているが、その中で主に漢字とアルファベットが頭文字語に用いられる。漢字を用いた頭文字語には(1)のような例がある。いずれも複合語句の構成要素の頭文字を組み合わせて作り出されるもので、漢字2文字を組み合わせたものが多い。中には「経済」のように既に頭文字語だと認識されなくなったものもある。これらは複合語の短縮という側面も持っており、しばしば複合語の短縮形として扱われる。本書でも複合語短縮の例として分析する(5.1節)。

- (1) 模擬 - 試験 → 模試
 東京 - 大学 → 東大
 経世 - 済民 → 経済

第5章

短縮語形成のメカニズム

5.1 短縮語の種類と基本原理

短縮語（略語）は現代日本語において数多く使われており、慌ただしい世相を反映してか、日々新しい短縮語が作り出されている。その生産性ゆえに、中高年者は若者たちが作り出す（1）－（2）のような短縮語が理解できず、逆に若者たちは（3）－（4）のような昔の短縮語の意味が分からないという世代間のギャップが生じている（窪蘭 2017a）。

- (1) ツアコン（＜ツアーコンダクター）、ミスコン（＜ミスコンテスト）、ボディコン（＜ボディーコンシャス）、カラコン（＜カラーコンタクト）、コミコン（＜コミックブックコンベンション）、オワコン（＜終わったコンテンツ）、シネコン（＜シネマコンプレックス）、ガクチカ（＜学生時代に力を入れたこと）
- (2) キムタク（＜木村拓哉）、クドカン（＜宮藤官九郎）、トヨエツ（＜豊川悦司）、マツジュン（＜松本潤）、ゴマキ（＜後藤真希）、ホリケン（＜堀内健）、エンケン（＜遠藤憲一）
- (3) 生コン（＜生コンクリート）、ラジコン（＜ラジオコントロール）、マザコン（＜マザーコンプレックス）、ゼネコン（＜ゼネラルコントラクター）、イトコン（＜糸こんにゃく）
- (4) エノケン（＜榎本健一）、アラカン（＜嵐寛寿郎）、かつしん（＜勝新太郎）、しばりょう（＜司馬遼太郎）、やすきよ（＜横山やすし・西川きよし）

第6章

語形成過程のアクセント：無標の出現

第1章～第5章では、複合語、アルファベット頭文字語、短縮語などの語形成過程を、(a) 出力の音韻構造がどのような原理や規則によって決まるか、(b) 出力を音韻構造がどのように規定・制限するか、(c) 音韻規則の適用を統語構造や意味構造がどのように制限するか、以上の3つの視点から考察した。複合語や頭文字語、短縮語はどの言語にも観察される主要な語形成過程であるが、第1章の冒頭(1.1節)で述べたように、日本語には他にいくつもの語形成過程が存在する。

この章と次の章(第7章)では、これまであまり注目を集めてこなかった語形成過程について、出力となる音韻構造(特にアクセント構造)がどのような原理によって導かれるか分析する。まずこの章では、ライオンズやとんねるずなど、複数形接辞の「__ズ」が付いた名詞のアクセント(6.1節)、ピカチュウ、ニドラン、カイリキーといったポケモン名のアクセント(6.2節)、ゴジラやリンプーのような混成語のアクセント(6.3節)、ストやポケモンなどの短縮語のアクセント(6.4節)をそれぞれ分析する。

章全体として出力の音韻構造を決定する要因(上記の(a)の問題)を入力構造との関係を軸に考察するが、これらの分析から見えてくるのは、第2章で提案したデフォルトのアクセント規則(1)のさらなる一般性である。

- (1) アクセント(核)は語末に接しない最右端のフット(rightmost, non-final foot)に置かれる。

6.1 「__ズ」(グループ名)のアクセント

グループ名によく「ズ」という接尾辞が付けられる。Beatles や Yankees

第7章

テンプレート型の語形成

前章では、従来の研究でアクセントが中心的な問題になってこなかった語形成過程について、出力となる語のアクセント構造がどのような原理で決まっているかを考察した。本書の最後を締めくくるにあたり、出力の語形が一定の鋳型（テンプレート、template）を持つ語形成過程を取り上げ、その鋳型を生成する原理と、アクセントを中心とする出力の音韻構造を考察する。

鋳型とは一定の構造を持つ出力形のこと、たとえば6.4節の(37b)で見た「ポケモン」タイプの短縮形では、複合語を構成する2要素の頭から2モーラずつを切り取っていた。この[2モーラ+2モーラ]というのが、「ポケモン」タイプの短縮形が持つ鋳型である。これに対して出力に鋳型を持たない語形成も存在し、たとえば前節(36)にあげた単純語の短縮過程は2~4モーラという標準的な長さを持つものの、特に標準的な鋳型があるわけではない。6.3節で考察した混成語の場合にも、1語の前半部分ともう1つの語の後半部分を結合するという規則はあるものの、出力形が特定の長さや構造を持つわけではない。この語形成過程にも鋳型はない。

この章では鋳型を持つ例として「マンマ、バアバ、ハイハイ」などの赤ちゃん言葉(7.1節)、「サッチャン、サッチー、マー君、アムラー」などのニックネーム(7.2節)、「マイウ、グンバツ」などのズージャ語(7.3節)、そして本書が「グレージュ」タイプと呼ぶ特定の混成語形成(7.4節)を題材に、それぞれの鋳型が持つ音形と、その鋳型が作り出される仕組み、出力形のアクセントを考察する。

7.1 赤ちゃん言葉

赤ちゃん言葉(baby-talk words)はマンマ(=食べ物)やポンポン(=お腹)

第 8 章

結び

本書では、語形成と音韻構造の関係を次の 3 つの視点から分析した。

- (1) a. 出力の音韻構造がどのような原理によって決まるか
(音韻構造の変化)
- b. 出力を音韻構造がどのように規定・制限するか (音韻制約)
- c. 音韻規則の適用を統語構造や意味構造がどのように制限するか
(統語制約、意味制約)

この 3 つのテーマの中で、これまで研究が集中してきたのが (1a) のテーマであった。本書でも第 2 章、第 4 章、第 6 章において、それぞれ複合語、アルファベット頭文字語、グループ名や混成語などの音韻構造を考察した。これに対し (1b) と (1c) は従来の日本語の分析では重視されてこなかった視点である。本書では第 5 章 (短縮語形成) と第 7 章 (テンプレート型の語形成) において (1b) の問題を論じた。また第 3 章 (一語化しない複合語) において (1c) の問題を考察した。

8.1 出力のアクセント構造

もう少し詳細に見てみると、本書では (1a) のテーマを「語形成規則の出力のアクセントがどのような仕組みで決まるか」という問題を中心に考察した。ここで特に重要なのが、「入力アクセントが出力アクセントに関与するか否か」という視点である。この視点から本書で分析した語形成規則を見てみると、次の表のように分類できる。